

### いのちとことば—アメリカ先住民の詩

別府 恵子

阪神大震災の日となった1月17日は、『学報』の原稿「KCELS報告」の締切日だった。当日提出できるよう、原稿はデフォレスト館にある研究室のデスクの上においてあった。そして、想像を絶する大地震の発生。まさに、すべての生の営みが停止した日だ。一カ月経ったいまも、被災地である阪神間では正常の生活は停止したまま、非常事態が続いている。

被災者の証言では、地響きとともに足元が激しく揺らぎ、直立できないままの姿勢で、お互い家族の名を呼びあい、「大丈夫？」と声をかけあったという。誰もが、愛するものの安否を確認するのに無我夢中で大声を出し、あるいは出そうとしたという。というのも、太古のむかしから、生物の生存と、音、発声、発話が密接に関係してきたからである。

それを、見事な口承詩で証明してくれるのがアメリカ先住民の文学だ。アメリカ文学史の見直しが叫ばれてす

でに久しいが、『コロンビア版アメリカ文学史』(1988年)は、スコット・モマディが語る彼らの部族に伝わるエピソードではじまる。そして最近、アメリカ先住民の文学研究がますます盛んになりつつある。そうした折りもあり、今年度で19回目を迎えるKCELS大会は、アメリカ詩、ネイティブ・アメリカンの詩に造詣の深い、東京都立大学名誉教授の金関寿夫氏を特別講師に迎えて、11月11日の金曜日に盛大に開催された。また、例年のように、第一部の研究発表も森田信子氏(英語学)と田中栄子氏(アメリカ文学)が、それぞれの研究成果を披露して、後輩たちによりモデルを示してくれたと思う。

アメリカ先住民の文学が学界の注目を集めていることは先に触れたが、彼らの文学、人生もまた自然環境と深い次元で関わっている。人災とも言われる大地震の被災地にある私たちは、大地を、青空を歌う彼らの口承詩にいま一度虚心に耳を傾けたい。(英文学科長)

### ■特別講演 (要旨)

#### ネイティブ・アメリカン口承詩 —魔法の言葉—

東京都立大学名誉教授 金 関 寿 夫

アメリカ大陸で、もう2万年も前から住んでいたという先住アメリカ人 (Native Americans) —通称アメリカ・インディアン—に、素晴らしい口承詩があることは、わりと最近にまで、一般には知られていなかった。その理由は、インディアンは、白人の移住者から、単なる野蛮人としてしか見られておらず、そういう民族に、注目に値するような文化などあるはずはない、という風に思われていたこと、そしてもう一つは、「口承詩」というもの自体にたいする偏見であった。



それが19世紀の後半、西欧人の間に、西欧ないしキリスト教文明中心主義歴史観を反省する機運がおり、それに伴って、人類学や民族学などという学問分野が進出して来た。そして、むしろ西欧文化の周辺にある文化にこそ、注目すべきものがある、という考えが有力になり従って北米インディアンの口承文学も、新しく脚光を浴びることとなった。

いわゆるインディアンには、殆どすべての部族に文字というものがないから、彼らの歌や、物語は、皆口から口へと伝えられるものばかりで、決して紙の上に書いて記録されるものではなかった。従って19世紀の半ばに、最初の英訳を作ったヘンリー・スクールクラフトという学者は、英語の分かるインディアンの助手を使って、唱えられる歌の、まず逐語的な英訳を作り、次にそれを整理して、英語の詩らしく仕上げるというやり方で、詩を採集した。そして以後、多くの優れた人類学者や宣教師、探検家などが、口承詩だけではなく、各部族に伝わる神話や民話なども発掘、英訳したのは、すべてこの方法による。また今世紀になって、とくに1960年代、例のビート詩のプログラムの中にあつた反西欧主義思想は、今度はアメリカの詩人を、西欧文化の周辺文化に注目させ、口承詩の発掘、そしてそれらの優れた英訳の出版を促し、以後徐々にアメリカ先住民口承文学に対する読者の興味を、広げていくのを助けた。一般に詩というものは、その原初的な段階においては、紙の上に書かれたり、印刷されたりしたものではなく、すべて口で唱えられて、後世に伝達されるという形を取った。そして文字によって記録されることなく、口伝で継承されてきた歌や説話のことを、当事者は、決して「文学」作品とは思っていなかった。「詩人」とか、「言語芸術」とかいう概念さえなかった。歌を歌い、物語を語る唯一の目的は、なんらかの「実用」以外の何ものでもなかったからだ。悪霊が災厄をもたらさないように願ったり、雨乞をしたり、豊漁、豊猟を祈るという、すべてなんらかの実用性をもつものばかりであった。

例えばババゴ族の多分雨乞の歌に、次のような素朴極まるものがある。「青い夜が降りてくる／青い夜が降りてくる／ほら、ここに／ほら、あそこに／トウモロコシの房が震えている」ババゴ族の人々は、おそらくこれを踊りながら、何十回、何百回となく唱えるのにちがいない。つまりこれを唱えれば雨が降る、と思つたのは、言葉には、魔法の力がこもっている、と彼らは信じたからだ。これはなにもインディアンだけではなく、私たちの祖先も、似たような考えをもっていた。例の「言霊」という概念である。日本文学の場合、言霊の力が薄れて

来たとき、つまりある言語表現が、実用から「美の創造」に転換したとき、初めて文学が生まれたのだ。ネイティブ・アメリカンの口承詩は、どれも皆文学以前のものばかり。だから力がある。

ネイティブ・アメリカンは、万物みな霊をもつと言う、いわゆるアニミズム信仰を、今も持ちつづけている民族だ。例えば次のオマハ族の「岩」という詩。「限りなく遠い／むかしから／じっとお前は／休んでいる／走る小道の真ん中で／吹く風の真ん中で／お前は休んでいる／鳥の糞をいっぱい頭にかぶって／足元から草をぼうぼう生やして／頭を鳥の綿毛で飾られて／お前は休んでいる／年老いた岩よ」このあまり風采の上がない岩の中に、オマハの人々は、神聖化された霊さえ見いだしている。この岩は神なのだ。そしてこうした例は、他にもたくさんある。詩人のスナイダーは、若いとき一緒に働いていたインディアンの樵が、ある日木を切っていると、木が「痛い！」と叫ぶので、即刻樵をやめて、町へ帰って行った、という話を記録している。インディアンの口承詩のうしろに民族のこうしたみずみずしい心、自然との「共生感覚」が、漲っている。

アメリカの現代詩人は、今やなにも、自分たちの文学的「祖先」として、ホメロスやダンテを持ち出す必要はないのだ。もう随分前から、アメリカ大陸には、彼らの「赤い肌した」ホメロスが、存在していたからである。“I am a song./I walk here.” (Hopi 族)

## ■研究発表 (要旨)

### Locative Inversion 構文に関する一考察

森田 信子

英語の Locative Inversion 構文 (例: Into the room walked John.) は文体的な構文とされるが、統語的原則に全く従わない訳ではなく、一見矛盾する現象も適切な構造付与等により、統語的に一貫した説明が可能である。その一方、特定の文脈内でのみ用いられるという文体的特性によって、統語分析だけでは扱いきれない側面も持つ。つまり、この構文は、統語部門と、その他の機能的な要因等との相互関係の必要性の証拠となりうる。

統語上の矛盾としては、場所を表す文頭のPPと文末のNPとが各々主語であることを示す様な相反するデータがある。又、この構文内からのWH移動はmarginalだが非文ではなく、どちらが主語でも、一見、説明がつかない。

このうち、NP主語の可能性は、類型論からも、他の統語現象を見ても、完全に排除される。そこで、PPが主語位置を占めるとすると、PPが主語と同様に振舞うthat 痕跡効果や繰り上げ等は説明できる。又、このPPを、項構造内で文末のNPとargument-predicate関係をなすpredicateと捉え、素性や格にresistすると仮定すれば、文末のNPと動詞との一致や主格付与等のPP主語分析とは矛盾する現象も扱える。更に、主語位置はpredicateが入るとA'位置になると考え、WH素性の一致も含めるようなRelativized Minimalityを採れば、主語PPを越えるA'移動の文法性も予測しうる。

その一方で、文末のNP全体をWH移動で抜き出す際に、同じNPの右方移動や他の要素のWH移動と比べ、容認度が著しく落ちるという観察があるが、統一的な統語分析の下では、NP全体のWH移動も誤ってOKと予測してしまう。この矛盾は、この構文の文脈上の機能と情報構造とを考慮に入れば解決する。英語では、焦点となる要素は通常、文末に置かれる。一方、この構文は、ある存在物を特定の場面へ導入する働きをしており、NPは焦点化のため目的語位置に留まっていると考えられる。ところが、NP全体をWH移動した場合、規定の焦点位置から焦点を担うべき要素が消え、この構文の文脈的機能に反してしまう。従って、統語的には許されるこのNPの移動は、文体的特性により、意味解釈上のfilterを用いることで排除され、正しい分析が得られる。

## The Age of Innocence と Old New York

### 一作品に描かれる都市像一

田中 栄子

Weberの都市のimageはThe Age of Innocenceの舞台となるOld New Yorkの都市像を指摘するかのようにより、彼の都市論は、当時のNew York像に適用できる。つまり、1870年代のNew Yorkは、Weberの言う「消費者都市」の都市であり、Civil Warを終えたアメリカの中央集権的資本主義国家としての体制づくりの時代背景の中で、貴族の直系の少数の子孫たちが、「自分自身の裁判所と独自の法をもち、団体としての性格をもち、また自律権をもち、特別な市民身分としての特権の担い手であった」時代なのである。

そして、また、Old New Yorkの「都市」としての概念は、Fryerも指摘しているように、Tönniesの言葉を借

用するなら、Gemeinschaft的都市とすることもできる。Gemeinschaftの「いかなる分離にもかかわらず、本質的には結合している社会」という「共同社会」の定義は、保守的で閉鎖的で一族の名譽を重視し、伝統や慣習が全ての行動のcodeとして機能したOld New Yorkのhigh societyにまさにあてはまるのである。

吉本隆明が「文学作品のなかに現れる都市は一種の印象都市だ」と述べているが、The Age of InnocenceにおけるOld New Yorkは、当時のNew Yorkのさまざまな印象的な場所を綴り合わせ、また、Old New York自体、やがては消え去っていくものだというWhartonの感懐がNew Yorkを古代都市像のimageにだぶらせ、そして、その時代の代表的人物の描写にその古代都市へのimaginationを連想させるという巧妙な語り口でWhartonのOld New York像は描かれている。作者の文学観に裏づけされた登場人物たちの心情関係をNewlandの自意識のdramaへと移行することで、この作品のplotは構築されているのだが、そのplotと関連づけられて描かれたのが、backgroundとしての当時のNew Yorkの都市像であった。

## キャンパスニュース

### ◎三宅先生ご退職

三宅晶子教授（1970年4月に着任）は本年3月末に定年ご退職されます。

### ◎帰国された先生たち

Wynne-Davies教授は1994年9月に英国へ、Strandberg教授は1995年1月に米国へ、McElwain専任講師は3月に米国へご帰国。

### ◎お迎えする先生たち

1995年4月には、英国からJohn Roe客員教授（University of York、ルネッサンス文学）と米国からMark Davidson専任講師（語学としての英語担当）が就任されます。

## 会 員 消 息

### ◇C. Broderick氏（本学教授）

米国ロング・アイランド大学で開催されたConference of Anais Nin（1994年5月）にて研究発表。

米国フロリダ州立大学におけるGraduate Seminar on Sexuality in French Literature（1994年6月）にて講演。

# KCELS

## ◇橋本登代子氏

1994年3月、University of Yorkでの留学を終え、M.A.を取得。1995年4月より関西外国語大学特任講師に就任。

## ◇平井雅子氏（本学教授）

カナダ、エドモントンで開催されたInternational Comparative Literature Association Conference (1994年8月)にて研究発表。

## ◇石原由貴氏

1994年10月より、東京工業大学専任講師に就任。

## 会員による出版紹介

### ◇風呂本惇子氏

『詩人シルヴィア・プラスの生涯』（アン・ステイブソン著・翻訳）晶文社 1994年8月

### ◇三宅晶子氏

*A Guide to Ezra Pound and Ernest Fenollosa's Classic Noh Theatre of Japan* (ed. Akiko Miyake).

Orono, Maine : The National Poetry Foundation and The Ezra Pound Society of Japan. 1994年12月

## 編集後記

阪神大震災で被災された方々、ことにご家族や大切なお友だちをなくされた方々、お家を失われた方々に心からのお見舞いを申し上げます。本学でも、建物や施設に被災した被害はまことに甚大でした。なじみの建物が復旧不可能のために取り壊されていくのは、見るにしのびないものがあります。でも、大学では学生も教職員も全員ぶじでした。ボランティア活動に参加した学生も多く、各自がこの試練から何かを学んでいるように思えます。入試の延期、新学期のくりさげなど異常事態ではありませんが、卒業式だけは予定通りです。

本来ならこのNewsletter編集前にKCELS会則変更に関するアンケート用紙を会員の皆様にお送りし、回答返送の際に消息や出版についても情報をお寄せ願うつもりでしたが、大地震発生のためそれをする余裕がなくなりました。したがって、今回アンケート用紙を同封致しますのでぜひご協力ください。アンケートの結果や、本号で紹介できなかった皆様のご活躍の様子は、次号のNewsletterに掲載させて頂きたいと存じます。その頃までには、物理的にも、精神的にも、被災地全域にかなりの復興が見られますようにと折りつつ。

## KCELS Newsletter 編集委員

(第19回KCELS大会準備委員)

- ◇別府恵子 ◇風呂本惇子 ◇本城智子  
◇渡部充 (ABC順)

## KCELS Newsletter No.10

編集発行 神戸女学院大学英文学会

〒662 西宮市岡田山4-1

Tel (0798) 51-8548